

令和五年二月

大学院文学研究科

伊藤新之輔 提出 学位申請論文

「卯月八日行事の研究」審査報告書

國學院大學

伊藤 新之輔 提出 学位申請論文（課程博士）

「卯月八日行事の研究」審査要旨

論文の内容の要旨

伊藤新之輔の学位申請論文「卯月八日行事の研究」は、日本の民間年中行事である四月八日行事についての民俗学からの研究である。行事の期日が行事名の総称として通用しているのは、昭和十四年一月刊の柳田國男編『歳時習俗語彙』が、四月八日の行事総称を長野県北安曇郡などに伝承されている「ウヅキヨウカ」「オヅキヨウカ」を採用して「卯月八日」とし、各地の伝承内容を記したことによる。これ以後、「卯月八日」は民俗学の学術用語となり、学位申請論文の標題にもこれが用いられている。

論文は、序章、第一章「卯月八日行事の全国的様相」、第二章「灌仏会の歴史的変遷」、第三章「卯月八日の花飾り」、第四章「卯月八日の薬師信仰」、第五章「卯月八日の花見」、第六章「卯月八日の死者供養」、終章「結語と今後の

課題」からなり、四〇〇字詰原稿用紙換算で七〇〇枚を超える分量となっている。論文の内容について各章の要旨を記すと以下のようなになる。

序章は先行研究の整理と検討を行い、卯月八日行事の研究は、折口信夫の大正四年「髻籠の話」、柳田國男の大正六年「卯月八日」で始まることから、折口と柳田の見解を最初に取り上げる。折口は、卯月八日に天道花などといって花を飾ることを、その名称から太陽神の依代であるとの見解を示すが、柳田は、この日には竿先に花を付けて立て飾るだけでなく、門口への花飾りもあり、また、山から藤花を採ってきて仏壇に捧げること、薬師信仰との関連があること、さらに山に登ることなど、卯月八日行事には多様な内容があることを提示する。これらから柳田は、古くは四月の満月日を新年の開始のような重要な日とし、これに関連するのが卯月八日行事であると仮説したとまとめている。

柳田は仮説提示とともに卯月八日の全国事例の収集を促したが、戦後の民俗学では和歌森太郎の「田の神迎え」としての位置づけが広く受け入れられ、卯月八日行事の研究は、昭和五十四年の日本民俗学会年会での木村博、伊藤唯真、宮家準によるシンポジウムと会誌での論述以後には進展がないとする。

第一章「卯月八日行事の全国的様相」では、先行研究の進展状況を踏まえ、卯月八日行事についての全国的様相を明らかにする。申請者の実地調査事例も含め、全国から一四六三例を集め、これを用いて行事の構成内容を整理し、分析する。この日の行事や習俗には、灌仏会や「花のとう」などの寺社行事、稚児行列や花見などの地域社会行事、死者供養や田の神祭りなどの家の行事とともに、昼寝の始め・農耕開始・衣替えなど時候の変わり目としての習俗があることを示す。これを踏まえ、再度和歌森太郎らによる卯月八日の田の神祭論を取り上げ、卯月八日行事はこれだけではないことを指摘する。

第二章「灌仏会の歴史の変遷」では、四月八日の寺院行事である灌仏会を取りあげ、その歴史の変遷を論述する。承和七年（八四〇）四月に宮中で灌仏会が始まり、五色水と釈迦誕生の山形を用意して行われ、至徳三年（一三三六）四月八日には新しく「華亭」が設えられ、中国大陸から香水に糖分を入れる方式が伝わり、その代用品として甘茶が用いられるようになる。その後、一八〇〇年代までには日本各地の寺院で花御堂と甘茶を用いた灌仏会が行われ

るようになったとする。明治時代以降には「釈尊降誕会」という行事名を経て、大正五年四月八日には仏教青年伝道会が「花祭り」として花御堂を曳き、花を撒きながらの稚児行列が練り歩く行事を行った。この「花まつり」形式が仏教系団体を通じて各地に広がったことを明らかにする。

この章では、灌仏会の甘茶の民間伝承には、眼病予防・治癒の呪力があり、また甘茶に伴う呪符・呪歌は初夏以降に発生する不快昆虫を除けるのが目的で、卯月八日は春から夏へ季節が転換する時候の行事としての性格を持つことを提示する。

第三章「卯月八日の花飾り」では、卯月八日の花飾り習俗には、竿先に花を取りつけて庭に立てて飾る竿花形式と門口などに花を飾る軒花形式があることを江戸時代の俳諧・狂歌などと、全国から収集した一四六三例から明らかにし、両者の分布状況と伝承内容を整理する。

竿花形式は近畿地方を中心に福井県、三重県伊賀地方、香川県、徳島県、瀬戸内海の島々（岡山県・香川県）、山口県、福岡県筑後地域、対馬、佐渡島、

長野県南部、静岡県西部に見られ、「テントウバナ」「タカバナ」などと呼ばれ、花はツツジが多く用いられている。この花は釈迦、太陽や月・星に供えるなど一律的ではないが、釈迦や太陽への献花伝承は広くあり、月への献花は近畿地方、先祖や蛇神への献花は近畿地方西部に伝えられているとする。また、竿花の花には呪力伝承があり、多くは除災祈願が付随するほか、花に行方不明者の搜索や蘇生の効果が付随し、卯月八日の花は、人間の靈魂に働きかける力を持つとの信仰があると指摘する。

軒花形式では、フジの軒花が茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県と千葉県東葛地域などの関東地方にあり、この花には豊蚕祈願や養蚕に関連する卜占に用いる伝承と、除災祈願に用いる伝承の二つがあることを明らかにする。軒花は養蚕が盛んな地域においては豊蚕祈願の花、それ以外の地域においては除災祈願の花と解釈されており、こうした伝承は講などの信仰集団や蚕神、薬師如来の参詣の場集まる人々、さらにそれにかかわる民間宗教者を通じて広がったことを推測する。

第四章「卯月八日の薬師信仰」では、卯月八日と薬師信仰の結びつきは、東北地方から北陸地方、北関東、長野県の北信・中信地方にかけてみられ、江戸時代には伊豆諸島にもみられることを示す。具体的には、東北地方ではこの日に薬師堂で眼病の治癒・予防祈願と灌仏会が併催され、長野県や山梨県にはこの日に薬師信仰と結びついた嫁や聾の里帰り伝承がある。さらに卯月八日の薬師行事と花飾り習俗の分布を対比すると、薬師信仰が顕著な東北・北陸などにはこの日の花飾りはなく、栃木県・埼玉県と長野県中信地方ではフジの軒花飾りが併存し、さらにこれらの地域以南から神奈川県にかけては、ウツギの軒花が併存することを示す。

第五章「卯月八日の花見」では、「花」の語源、柳田國男と折口信夫の花に関する論考を取り上げて「花」の意味を検討し、「花見」は多義的であることを示す。続いて俳諧や狂歌の「花より団子」の用例をあげ、一六〇〇年代には卯月八日の「花より団子」の成句が民間に定着していることを明らかにする。卯月八日の「花より団子」の成句伝承からは、この花はツツジで、団子は死者

や月への供物を意味していることを示す。

また、卯月八日の花見伝承は、東北から九州までの全国にあり、この花見には死者供養と結びついている事例のあることを示して分析し、花見の行われる場所は卯月八日に死者霊が集まると信じられている場所でもあり、この日の花見は生者と死者の交流のために行われるという見解を示す。

第六章「卯月八日の死者供養」では、福井県若狭地方には卯月八日に松尾寺参りの習俗があり、その具体例としておおい町大島での松尾寺参りとオヅキヨウカの実態を叙述する。卯月八日には松尾寺に死者霊が集まるという信仰があり、ここが「死生者交流の場」となっていることを説く。さらに兵庫県など畿地方西部での死者供養の実態から、加古川流域には死者が集まるとされる寺院がある山野に出かけて花見を行うハナハジメ行事が、丹波地方と但馬地方には新仏の家や墓に参るが、ハナオリババが出るという山へは行かないハナオリ行事の二系統の伝承があることを示す。

終章「結語と今後の課題」では、第一章から第六章までの総括として各章節



での論述を要約し、死者に花を手向けることの意味の検討、琉球・沖縄も含めた幅広い死者供養行事の実相把握などを今後の課題としてあげた上で、卯月八日の死者霊祭祀について改めて取り上げる。具体的には、竿花の伝承は死者霊と関連するもので、また卯月八日に出向く山や山にある寺には死者霊がおり、それに「会いに行く」という伝承が重視されると再説する。そして、卯月八日の死者供養における花の特徴は赤い花で、多くヤマツツジが用いられる。兵庫県では、普段は赤い花を仏壇に供えないが卯月八日だけは供える、卯月八日以外に赤い花を供えると悪いことが起きるといわれていることを示す。また、卯月八日の花と死者供養の関係は、京都では死者供養のために比叡山へ花摘みに行き、近畿地方では死者に供えるための赤い花を竿花にし、仏壇への供花としていた。以上のように、この日の花摘み習俗は死者供養と強く結びついていると改めて説く。

## 論文審査の結果の要旨

論文題目の「卯月八日」は、論文の内容の要旨冒頭で述べたように昭和十四年一月刊の柳田國男編『歳時習俗語彙』で、四月八日の行事に対する民俗学の学術用語として定立されている。これに先だってこの行事については、折口信夫が大正四年の「髯籠の話」で取り上げ、柳田國男も大正六年には「卯月八日」という論文で行事内容を検討している。その後、戦後には和歌森太郎や五来重、最上孝敬などによる論述がある。昭和五十四年には、日本民俗学会年会シンポジウムで木村博、伊藤唯真、宮家準がそれぞれの研究分野からこの日の行事の内容検討、文化的位置づけを行っているが、卯月八日研究は、以後は目立った進展がないまま現在に至っている。柳田が早くに卯月八日行事の全容把握を促していたにもかかわらず、全国的な伝承内容の把握も行われていなかった。

こうした研究状況のなかで、学位申請者は自身の実地調査も含め、民俗学が明らかにしてきた各地の民間伝承資料をもとに、全国の卯月八日の行事と伝承について一四六三例を集め、これを用いてその内容を整理し、分析を加えてい

る。琉球・沖縄文化、アイヌ文化にはこの習俗は確認できないので、卯月八日行事は青森県から鹿児島県にかけての習俗として全国的な実態把握を行い、いくつかの視点から分析と考察を行っている。これによってこの行事・伝承の全容が捉えられるようになった。申請論文で第一にあげられる成果は、ここにある。卯月八日の行事や伝承についての民俗学における現時点での説明、認識には訂正が必要なことを実証的に示しており、昭和五十四年段階に留まっていた観が強い卯月八日研究を進展させたと評価できる。

具体的にいくつかをあげると、一四六三例の卯月八日の行事と伝承をもとに、この時の花飾りには「竿花」と「軒花」の二形式があり、前者は近畿地方を中心に東は長野県の中信・南信地域、佐渡島に、西は岡山県東部、四国の徳島県・香川県に分布が連続し、山口県や福岡県の一部にも見られる。後者は埼玉県・栃木県・群馬県と茨城県・千葉県・山梨県の一部、長野県の中信・南信・木曾、さらに鳥取県・島根県・広島県それぞれの一部に見られるという分布状況を分布図作成によって明らかにしている。こうした列島における花飾り形式

の広がりをもとに、竿花、軒花に付随する諸伝承の実相を明らかにしている。竿花については、その名称、飾る花の種類、竿先に花をつけて立てることの意味伝承と、この花が行方不明者の捜索やその者の蘇生、健康祈願、安産祈願などの呪的対応に使用されていることなどを示している。軒花については、豊蚕祈願など養蚕習俗との結びつき、フジの花を掲げることは薬師信仰と結びついていることなどを示している。現在の民俗学では、卯月八日を水田耕作の開始時の田の神迎えを軸とする行事と説明するのが通例であるが、右記の事実から再検討が必要であることが明白になった。また、竿花、軒花については、江戸時代中期以降の諸記録・文献などにも見られることを明らかにしている。

評価できる第二点目は、関連行事も含めて卯月八日行事の歴史的推移を検討し、明らかにしていることである。各家での卯月八日行事に対して、寺堂では釈迦誕生を説く灌仏会が行われており、その歴史的推移を明らかにしている。また、卯月八日の花見習俗と卯月八日の「花より団子」の成句について、俳諧や狂歌などからその花はツツジであったのが、後に次第に桜に変化しているこ

とを明らかにしている。さらに卯月八日と薬師信仰との結びつきは十四世紀後半には確認できるなど、随所で卯月八日行事の歴史性に言及している。

評価できる点をもう一つあげると、福井県若狭地方で行われている卯月八日の松尾寺参りについて、その具体的な様相をおおい町の参詣者に同行するなどして詳細に叙述している。また、兵庫県加西市の法華山一乗寺のハナハジメの実地調査を行うとともに、兵庫県とその隣接地域には卯月八日にハナオリとい、山からツツジなどを採って来て仏壇に供える習俗があることを明らかにしている。福井県おおい町では卯月八日には竿花も立てており、竿花と松尾寺参りが連続する習俗であるなど、実地調査ならではの成果が認められる。こうした成果に続けて、たとえば群馬県赤城山麓の家々では、死者が出ると翌年の四月八日にこの山の地蔵岳に登り、そこにいる死者霊に会いに行くなど卯月八日の死者霊祭祀の全国的様相も分布図を示して明らかにしている。

本論文にはこのように新たな見解の提示と従来の研究の深化が見られるが、一方では、竿花と軒花の分布の関係をどのよう考えるのか、これらが歴史

的には江戸時代以降の記録・文献に留まっていることの検討、竿花の意味伝承の多義性や軒花と豊蚕祈願との結合の分析、さらには灌仏会の釈迦誕生仏への甘茶掛けについての民俗学からの意味づけ、卯月八日と嶽登り習俗との関係、年中行事全体の中での位置づけなど、論述や視野が十分ではない点が見られる。

しかし、卯月八日行事について一四六〇ほどの事例を収集しての比較対照研究と、松尾寺参りなどの実地での事例研究は、民俗学の研究方法の有効性を示すとともに卯月八日研究の成果としては十分な論述となっている。よって本論文の提出者である伊藤新之輔は、博士（民俗学）の学位が授与される資格があると認められる。

令和五年二月十六日

主査 國學院大學教授 小川直之

副査 國學院大學教授 大石泰夫

副査 國學院大學准教授 服部比呂美